平成２０年度　氷見市職員自主研修報告

斎藤弥九郎と水戸藩に関する調査

斎藤弥九郎と水戸藩との関わりは深い。後に徳川斉昭の側近として活躍する藤田東湖（尊皇攘夷思想の中核的存在）が弥九郎と同じ岡田十松の撃剣館で剣術を学んだことに由来する。その後、弥九郎は徳川斉昭から扶持を得ることとなり、安政３年には、弥九郎が他に先んじて取り組んでいた西洋式の軍事演習（銃槍剣を組み合わせたもの）を斉昭の前で披露し、褒賞を得た。また弥九郎の思想も尊皇攘夷に傾いていった。

弥九郎が訪れた藩校旧弘道館や、関わりのあった人々とのゆかりの地を訪ね、新たな知見や史料を得ることを目的とする。

調査研修箇所

史跡調査

旧弘道館（国特別史跡）

水戸藩の藩校として第 9 代藩主、徳川斉昭により天保 12 年（1841 年）8 月に創設（仮開館）された。藩士に文武両道の修練をつませようと武芸一般はもとより、医学・薬学・天文学・蘭学など幅広い学問をとり入れた、いわば総合大学というべきものであった。当時の藩校としては国内最大規模のものであり、弘道館建学の方針を示す「弘道館記」の内容や学校教育の特色によって天下に有名になった。

第 15 代の将軍となった慶喜も父斉昭の厳しい教育方針で 5 歳の時から弘道館において英才教育を受け、さらに慶応 3 年（1867 年）の大政奉還の後、謹慎した至善堂が今も残っている。

現在も一部分が保存され旧弘道館として国の特別史跡になっているほか正庁・至善堂・正門の 3 ケ所は重要文化財に指定されている。

弘道館の仮開館式には当時の剣豪が招待され、斎藤弥九郎や千葉周作なども出席している。

藤田東湖の墓所（常盤共有墓地）

２代藩士水戸光圀によって創設された、水戸藩士のための共同墓地である常盤共有墓地内に、藤田東湖と父藤田幽谷の墓が並んで建立されている。

藤田東湖は、文化３(1806)年、水戸学者である藤田幽谷の次男として誕生。年少より文武の修行に励んだ。１４歳の頃、父とともに江戸へ出た際、岡田十松の撃剣館に入門し、ここで弥九郎と出会うこととなる。文政１０(1827)年家督を継いで二百石を賜り、進物番となる。史館編修、同総裁代役に進み、文政１２(1829)年藩主継嗣問題で徳川斉昭を擁立して奔走した。天保元(1830)年郡奉行に挙げられるや、経世済民に留意し、しばしば藩主斉昭に封事を呈し、人心一新の要を唱え、武備充実、庶政刷新の急務を強調した。江戸通事御用役を経て天保１１(1840)年側用人となる。この間土地改正掛、弘道館造営掛等に任じ、斉昭の左右に侍して藩政改革に尽力した。

天保８(1837)大塩平八郎の乱が発生し、江川太郎左衛門の命によって弥九郎が大阪へ派遣されてその状況を検分してきたが、そのことを東湖に詳細に伝えている。その内容が「浪華騒擾記事」として東湖が記したものが残っている。

天保１２(1841)年結城寅寿と共に勝手改正掛を命ぜられた。弘化元(1844)年 5 月斉昭に随従して出府したが、斉昭罪せられて致死謹慎を命ぜられ、東湖また職を免ぜられて閑居の身となり、同年 9 月に至って禄を奪われた。嘉永３(1850)年末許されて水戸に移り、ついで嘉永５(1852)年春、謹慎を解かれ、これより東湖と号した。翌嘉永６(1853)年ペリー来航後、斉昭が幕政に参与するに及んで江戸藩邸に召され、同年 7 月海防掛に任じて江戸詰となり、再び斉昭を補佐して藩政に参与した。同年 11 月 18 日藩主慶篤より手書を賜わり、名を誠之進と改めた。安政元(1854)年正月側用人に復し、安政２(1855)年 9 月学校奉行を兼ね、通計六百石となる。同年 10 月 2 日関東に大地震が起り江戸の官舎にて圧死した。享年 50 歳。このときのことについて、斎藤弥九郎の伝記である「幕末偉人斎藤

弥九郎伝」（大正７年刊）には、倒壊した建物の下敷きになり亡くなった東湖を引き出し、自家の長持に納めて、水戸へ送り届けたとされている。

那珂湊反射炉跡（ひたちなか市）

安政 4 年(1857)に完成した水戸藩営大砲鋳造所。オランダの技術により大型金属溶解炉が 2 基建設され，２０数門の大砲が鋳造された。元治元年(1864)の騒乱（天狗党の乱）で破壊されたが，昭和 12 年にほぼ原型どおりに復元された。（茨城県指定史跡）

水戸藩は，徳川斉昭(1800~60)が嘉永年間に至って藩政への関与を許されるようになると，兵器の充実，とりわけ従来の銅製に変えて鉄製大砲鋳造の必要性を痛感するようになり，南部藩士の大島高任（総左衛門）らを反射炉建設の技術者として採用した。建設地としては吾妻台が選ばれた。地盤の強固なこと，水戸城下３里の近郊で経済的にも廻船業で賑わう藩内随一の繁栄地であること，原料の鉄と燃料の石炭の調達運搬に便利であること，錐入れ水車場の建造にも便宜を有することなどを満たす場所と判断されたためであろう。

また、この反射炉がある、あづまが丘公園には山上門という門がある。これは水戸藩の江戸小石川邸で勅使奉迎の門であったものを、昭和１１年に移築したものである。（ひたちなか市指定有形文化財（建造物））

弥九郎も小石川邸を出入りしており、この門をくぐったことであろう。

<u>資料調査</u>

茨城県立歴史館

事前にアポイントメントを取ってあった歴史館の首席研究員、永井博氏を訪問した。

今回の調査の目的は、斎藤弥九郎と水戸藩とのつながりについて、これまでいわれている事柄の事実確認を水戸側の史料によって確認することにあった。

永井氏には、以下の質問項目に従って、質問した。

水戸藩と斎藤弥九郎との交流に関する質問事項

大正 7 年に発刊された『幕末偉人斎藤弥九郎伝』には水戸藩とのつながりについての多くの記述があります。また、近年発刊された『剣客斎藤弥九郎伝』にも詳細な記述があります。
これらの内容について、水戸藩側の客観的な史料等によって、その事実確認を行いたいと考えております。

１　天保八年「大塩平八郎の乱」発生時の「浪華騒擾記事」に関する研究論文等をご存知でしたらご教示ください。

２　天保九年十一月、弥九郎は水戸藩より合力扶持を得たとされていますが、水戸藩側にそのことを示す記録がありますでしょうか？また弘化元年五月の斉昭謹慎の命を受けた際に廃され、また復活したとされていますが、そうしたことも示す記録は確認できますでしょうか？また合力扶持とはどういう性格のものでしょうか。

３　天保十二年の弘道館の仮開館式に著名な剣豪を招待し、その中に斎藤弥九郎や弟の斎藤三九郎がいるとされていますが、水戸藩側の記録で確認できますでしょうか。またその後約 1 か月滞在したこととされていますが、その間の行動（剣術指南）について記録で確認ができますでしょうか。

４　弘化元年、武田彦九郎と吉成又衛門が斉昭公の冤罪を雪（すす）がんと脱藩して江戸へ上った際、弥九郎が内藤新宿の萬屋弥三吉方へ匿ったとされています。このことについて記録はありますか。
その際、斉昭公が弥九郎に対し、両名の探索依頼の密書を届けたとされていますが、そのことを示す記録は確認できますでしょうか。

６　嘉永四年十二月、吉田松陰が東北遊歴にあたり、弥九郎の長男斎藤新太郎の紹介状を持って、水戸の永井政助を尋ねています。永井政助に関する史料に斎藤新太郎に関する記事は確認できますでしょうか。

７　安政二年十月、安政の大地震で家の梁の下敷きになって亡くなった藤田東湖の遺骸を弥九郎が引き出し、門人に命じて、自家の長持に納めて、水戸へ送り届けたとされています。このことを確認できる史料はありますでしょうか。

８　安政三年四月五日、小石川藩邸において、弥九郎一門は、銃剣槍の野試合を演じて、斉昭公にご覧に入れたとされています。その際、賞賛した斉昭公より「報国」の二字を大書して、刀剣馬具とともに下賜されたとされています。
このことについて、お尋ねいたします。
① この野試合について、水戸藩側の記録は確認できますでしょうか。
② 下賜された馬具についてですが、斎藤家に伝来する和鞍（「嘉吉」の銘あり）がその馬具だという説もあります。水戸藩側の記録にその事が確認できるものがあるでしょうか。

水戸藩幕末史の専門家で、徳川斉昭公をテーマとした展覧会を企画する永井氏も、こちらの質問について、不明な点が多いとした。その理由は、水戸藩の幕末の公式記録は、幕末の動乱等により残されていないためであるとのことである。

私たちは、氷見市で収集した資料等を渡して今後の研究に生かしてもらうこととし、その中で、弥九郎にまつわる資料があれば提供してもらうことをお願いした。

義烈館

二代藩主徳川光圀公と九代藩主徳川斉昭公を祀る常磐神社の境内にある「義烈館」は、光圀公と斉昭公の遺品、遺墨等を多数展示する。義烈館の名は、光圀公が「義公」、斉昭公が「烈公」と称されたことに由来する。

彰考館徳川博物館

徳川博物館は、水戸徳川家 13 代当主徳川圀順公が、伝来の大名道具や古文書類を寄贈して設立した財団法人水府明徳会の博物館として、昭和 52 年(1977)に開館した。

所蔵品は、徳川家康公の遺品（駿府御分物-すんぷおわけもの-）を中心に家康公の子である初代頼房公、2 代光圀公ら歴代藩主や、その家族の遺愛の什宝約３万点に及び、敷地内にある彰考館文庫収蔵の『大日本史』草稿本や、その編纂のために全国から集められた古文書類約３万点からも史料が展示されている。